

Wentzell の境界条件をみたす
Markov 過程

京大 理 志 賀 徳 造

§. 0

Wentzell 型の境界条件をみたす拡散過程については、佐藤-上野の結果がある。それは、Wentzell 型の境界条件をみたす拡散過程と、境界上の Markov 過程が 1:1 に対応することを結論づけている。そこで、境界上の Markov 過程が存在するための条件を、Wentzell の境界条件の中に条件化することが残された重要な問題であった。

最近、Courrège, Bony, Priouret は 拡散過程より、広い枠組の中で、本質的には、微分方程式論の結果を用いることにより、解決を与えている。

本報告は、この Courrège, Bony, Priouret の結果の紹介である。

§. 1 Singular operator

D : N -dim orientable manifold (C^∞) の domain

\bar{D} は compact, ∂D は C^3 -class の滑らかさを仮定する。

$S(x, dy)$ が \bar{D} 上の singular kernel であるとは 次の条件をみたす $\bar{D} \times \bar{D}$ 上の kernel のことである。

(S₁) $S(x, x) = 0$, $S(x, dy)$ は dy によって \bar{D} - x 上の Radon measure

(S₂) 任意の local coordinate (U, χ) に対して

$U \supset K$: compact

$\int_K S(x, dy) |\chi(y) - \chi(x)|^2$ は U 上で有界

関数の系 $\{\sigma_\alpha(x, y)\}_{(x, y) \in \bar{D} \times \bar{D}}$ を次のように構成して、以後これを fix する

(V₁) (U_α) は \bar{D} の 2 つの finite covering $\bar{D} \subset U_\alpha$

(U_α, χ_α) からの local coordinate 12 するものを選び、

$(U_\alpha \times U_\alpha, \bar{D} \times \bar{D} - \bigcup_\alpha \bar{U}_\alpha \times \bar{U}_\alpha)$ は $\bar{D} \times \bar{D}$ の finite covering

これにそれぞれ 1 の分解 $\xi = (\sigma_\alpha(x, y), \rho)$ として

$\sum \sigma_\alpha \equiv \sigma$ とおき、 ξ は locally unit function とし、

$0 \leq \sigma \leq 1$, $\text{supp}[\sigma_\alpha] \subset U_\alpha \times U_\alpha$,

$u \in C^1(\bar{D})$ に対して

$$\theta_x u(y) \equiv \sum_{\alpha} \sigma_{\alpha}(x, y) \left[u(x) + \sum_{k=1}^N \frac{\partial u}{\partial X^k}(x) (\chi_{\alpha}^k(y) - \chi_{\alpha}^k(x)) \right]$$

によって定義された $\theta_x u$ を 1 次の Taylor 展開という。

次の形の作用素 S ($\mathcal{D}(S) = C^2(\bar{D})$) を singular operator という。

$$(S_1). \quad S u(x) = a(x) u(x) + \frac{\partial u}{\partial X} + \int_{\bar{D}} S(x, dy) (u(y) - \theta_x u(y))$$

$$(S_2). \quad S 1 \leq 0$$

==に、 X は vector field on \bar{D} である。

さらに、 $S; C^2(\bar{D}) \rightarrow C(\bar{D})$ continuous と仮定する。

$A \in \bar{D}$ 上の uniformly elliptic operator of 2nd order とする。

ここで取り扱おう Markov 過程の特性作用素は次の形のものである。

$$A + S = W$$

W は elliptic operator に関する最大値原理がそのまま成り立つことを示そう。

Prop. 1

$$u \in C^2(\bar{D}) \quad \sup u = u(x_0) \geq 0 \quad \exists x_0 \in \bar{D}$$

ならば、

$$W u(x_0) \leq 0$$

☹️ $Au(x_0) \leq 0$ はよく知られてゐる

$$\begin{aligned} Su(x_0) &= a(x_0)u(x_0) + \int_{\bar{D}} S(x_0, dy) (u(x_0) - \sigma(x_0, y)u(x_0)) \\ &= u(x_0)S1(x_0) \leq 0 \end{aligned}$$

Prop. 2

$$u \in C^2(\bar{D}) \quad Wu \geq 0 \text{ in } \bar{D}$$

$\sup u = u(x_0) \geq 0, \exists x_0 \in D$ ならば u は定数である.

☹️ $D \subset \mathbb{R}^n$ の場合に示せば, manifold の場合に修正することは容易.

今, u が定数でないとは仮定しよう.

$M = \{x \in \bar{D} ; u(x) = \sup u\} \neq \bar{D}$ だから, M と唯一実
で接する球が存在する. その球を $B(0, r)$ としよう.

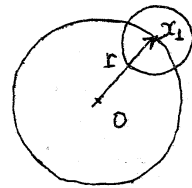
$$B(0, r) \cap M = \{x_1\}, \quad |x_1| = r$$

その時, 次のような関数が存在する.

$$v \geq 0 \text{ in } B(0, r)$$

$$v \leq 0 \text{ in } B(0, r)^c$$

$$Wv(x_1) > 0$$



この v は次のようにして構成される.

$$v_K(x) = e^{-K|x|^2} - e^{-Kr^2} \text{ は前の2条件をみたしている.}$$

更に, Av_K を具体的に計算すれば, A が uniformly elliptic (\bar{D} : compact) より下からの評価がえられ, 更に singular

kernel の性質を考慮して, K を定めればよい。

この v に対して,

$$\exists d > 0, \quad Wv(x) > 0 \quad \text{in } x \in B(x_1, d)$$

$$u_\lambda(x) \equiv u(x) + \lambda v(x) \quad (\lambda > 0) \quad \text{とおけば, } Wu_\lambda(x) > 0$$

$$x \in B(x_1, d)$$

ところが u_λ は $B(0, r) \cap B(x_1, d)$ で $\sup u$ を attain

するよ様に, λ を ∞ に近づけていく

i.e. $\sup_{x \in B(0, r) \cap B(x_1, d)^c} u(x) < \sup u$, $u_\lambda(x_1) = \sup u$ に注意すればよい。

ところが, これは Prop. 1 に矛盾する。

Prop. 3

$$u \in C^2(\bar{D}) \quad Wu(x) \geq 0, \quad x \in \bar{D}$$

$u(x_1) = \sup u \quad \exists x_1 \in \partial D$ ならば, u は定数であるか,

または $\frac{\partial u}{\partial n}(x_1) < 0$ (== n は内向き法線を表わす)

(証明 略)

Prop. 3 の証明は Prop. 2 とほとんど同じ方法で出来る。

(注) Prop. 1 より W は $C(\bar{D})$ の中で closable である

$\{W, \mathcal{D}(W) = C^2(\bar{D})\}$ の closure を \bar{W} と表わす。

§.2 Minimal resolvent

\mathbb{R} 回導関数が λ -次 Hölder continuous であるような関数の空間は、適当なノルム (Hölder norm) により Banach 空間になる。この空間を $C^{\mathbb{R}, \lambda}$ によって表わす。

次の事実は微分方程式論において基本的である。

Lemma. 1 [Dirichlet 問題]

$A \in \text{class } C^{0, \lambda}$ の elliptic operator とする (i.e. $A: C^{2, \lambda} \rightarrow C^{0, \lambda}$)

とするとき

$$C^{2, \lambda}(\bar{D}) \longrightarrow C^{0, \lambda}(\bar{D}) \times C^{2, \lambda}(\partial D)$$

$$u \longmapsto (Au, [u]_{\partial D}) \text{ は isomorph である} \\ \text{(1:1, onto の意)}$$

Lemma. 2 [oblique derivative を含む境界問題]

$\tau \in \partial D$ 上の class $C^{1, \lambda}$ の vector field とする

$\mu \in C^{1, \lambda}(\partial D)$ とする

$$C^{2, \lambda}(\bar{D}) \longrightarrow C^{0, \lambda}(\bar{D}) \times C^{1, \lambda}(\partial D)$$

$$u \longmapsto \left(Au, \mu \frac{\partial u}{\partial \eta} + \frac{\partial u}{\partial \tau} \right) \text{ は isomorph である.}$$

次に Index theorem の簡単な形を述べよう。

E, F 、各々 Banach 空間。

T を E から F への有界 operator とする。

もし $\dim [\text{Ker}(T)] < +\infty$, $\text{codim} [\text{Im}(T)] < +\infty$

ならば "T は index をもつ" といふ。

$$\chi(T) \equiv \dim[\text{Ker}(T)] - \text{codim}[\text{Im}(T)] \text{ は } T \text{ の index.}$$

といふ。

Lemma 3

$T: E \rightarrow F$ bdd. かつ isomorph.

$K: E \rightarrow F$ compact operator ならば $T+K$ は

"index 0" をもつ。

⊙ T^{-1} は $F \rightarrow E$ の bdd op. であるから $T^{-1}K \equiv H$ は

$E \rightarrow E$ の compact operator.

従って $I+H$ が "index 0" をもつことを示さねばよい。

H は compact であるから $\dim[\text{Ker}(I+H)] = \dim[\text{Ker}(I+H^*)] < +\infty$

$$\dim[\text{Ker}(I+H^*)] = \dim \{ f; (f, (I+H)x) = 0, x \in E \}$$

$$= \text{codim} \{ (I+H)x, x \in E \}$$

従って $I+H$ は "index 0" をもつ。

Theorem 1

$S: C^2(\bar{D}) \rightarrow C^{0,\lambda}(\bar{D})$ continuous.

その時 $\forall d > 0$ に對して

$$C^{2,\lambda}(\bar{D}) \rightarrow C^{0,\lambda}(\bar{D}) \times C^{2,\lambda}(\partial D)$$

$u \mapsto ((W-d)u, [u]_{\partial D})$ は isomorph である

⊙ S は $C^{2,\lambda}(\bar{D}) \rightarrow C^{0,\lambda}(\bar{D}) \wedge$ の compact operator.

$u \mapsto ((W-d)u, [u]_{\partial D})$ は次の三つの写像の

和である。(1) $u \mapsto (Au, [u]_{\partial D})$ (2) $u \mapsto (Su, 0)$

(3) $u \mapsto (-du, 0)$ (1) は isomorph. (2), (3) は compact

だから, Lemma. 3 により, $u \mapsto ((W-d)u, [u]_{\partial D})$ は

"index 0" をもつ.

故に, 1:1 を示せば, この定理は証明出来ることとなる.

$(W-d)u=0, [u]_{\partial D}=0 \Rightarrow u=0$ であることを示す.

Prop. 1 より直ちにわかる.

(注) Th. 1 は $W \neq 0$ ならば, $d=0$ の時も正しい. (⊙ Prop. 2)

Theorem 2

(i) $\forall d > 0, \forall f \in C^{0,\lambda}(\bar{D})$ に対して

$$\begin{cases} (d-W)u = f \\ [u]_{\partial D} = 0 \end{cases} \text{ は } C^{2,\lambda}(\bar{D}) \text{ の中に unique solution をもつ.}$$

この solution を $u = G_\alpha^d f$ と表わす.

(ii) G_α^d は $C(\bar{D})$ 上の sub-Markov resolvent operator に拡張出来る.

(iii) $\forall f \in C(\bar{D})$ に対して $u = G_\alpha f$ は

$$\begin{cases} (d-\bar{W})u = f \\ [u]_{\partial D} = 0 \end{cases} \text{ の unique solution である.}$$

(iv) for $\forall f \in C_0 \equiv C(\bar{D}) \cap \{u : [u]_{\partial D} = 0\}$
 $\| \alpha G_\alpha f - f \| \rightarrow 0 \text{ as } \alpha \rightarrow \infty$



(i) は Th. 1 より明らか. (ii) は G_α が $C^{0,\lambda}(\bar{D})$ 上 τ positive sub Markov であることを示せば十分. それは Prop. 1 から容易にわかる.

(iii), W の closable だから, closure の定義により.

(iv) $f \in C_0^2(\bar{D})$ に對して, $(\beta - W)f \equiv g$ とおくと

$$[f]_{\partial D} = 0 \text{ から } f = G_\beta^0 g.$$

$$\| \alpha G_\alpha^0 f - f \| = \left\| \frac{\beta}{\alpha - \beta} G_\beta g \right\| + \left\| \frac{\alpha}{\alpha - \beta} G_\alpha g \right\| \rightarrow 0 \text{ (} \alpha \rightarrow \infty \text{)}$$

従って $f \in C_0(\bar{D})$ についても, 明らかになり立つ.

Yosida-Hille の定理により, G_α^0 には $C_0(\bar{D})$ 上の continuous semi-group $\{T_t^0\}$ が対応する.

Theorem 3

(i) $\alpha > 0$, $\varphi \in C^{2,\lambda}(\partial D)$ に對して

$$\begin{cases} (\alpha - W)u = 0 \\ u(x) = \varphi(x) \quad x \in \partial D \end{cases} \text{ は } C^{2,\lambda}(\bar{D}) \text{ の中 unique solution}$$

をもつ. これを $u = H_\alpha \varphi$ と表わす

(ii) H_α は $C(\partial D) \rightarrow C(\bar{D})$ への positive contraction operator に拡張出来る

(iii) $H_{\Delta} \varphi$ が $C^2(\bar{D})$ に属し、 $H_{\Delta} \varphi$ が ∂D 上の実 x_0 で、
nonnegative maximum をとれば、 $H_{\Delta} \varphi$ は定数であるか、
又は $\frac{\partial}{\partial n} H_{\Delta} \varphi(x_0) < 0$ である。

(☺) (i), (ii) は Th. 2 と殆んど同じ。

(iii) は Prop 3 より容易にわかる。

§. 3 Wentzell の境界条件について.

S と同じようにして、境界上の singular operator T を定義する。

$\partial D \times \beta \bar{D}$ 上の kernel $t(x', dy)$ は、次の条件 $(W_1), (W_2)$ を満たすとき、境界上の singular kernel という。

$$(W_1) \quad t(x', \{x'\}) = 0$$

$t(x', dy)$ は dy によって $\bar{D} - \{x'\}$ 上の Radon measure

$(W_2) \quad \forall (U, \chi)$; 境界を表現する local coordinate. 12376

$$\int_{\mathbf{K}} t(x', dy) \left[\chi^N(y) - \sum_{i=1}^{N-1} (\chi^i(y) - \chi^i(x'))^2 \right] \leftarrow \text{は } U \text{ 上有界}$$

($\mathbf{K} = \{y \in \mathbf{K} \mid \mathbf{K} \text{ は } U \text{ の compact subset} \}$)

(注) 境界を表現する local coordinate (U, χ) , $U \cap \partial D \neq \emptyset$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} x \in \bar{D} \text{ ならば, } & \chi^N(x) \geq 0 \text{ であって,} \\ x \in \partial D & \Leftrightarrow \chi^N(x) = 0 \text{ なる座標系.} \end{cases}$$

境界を表現する座標系 (U, χ) は、各境界点に対して

常に存在するので、境界点を含む local coordinate は、いつでも

境界を表現するものを選んでおく。

次のように定義される $\Theta_{x'}^* u$ を境界上の1次のTaylor展開という。

$$\Theta_{x'}^* u(y) = \sum_{\alpha} \sigma_{\alpha}(x, y) [u(x) + \sum_{j=1}^{N-1} \frac{\partial u}{\partial \chi_{\alpha}^j}(x') (\chi_{\alpha}^j(y) - \chi_{\alpha}^j(x'))]$$

さらに、境界上の singular operator T は、次のように定義される。

$u \in C^2(\bar{D})$ に對し

$$Tu(x') = \eta(x') u(x') + \frac{\partial u}{\partial Z}(x') + \int_{\bar{D}} t(x', dy) [u(y) - \Theta_{x'}^* u(y)]$$

$$T1(x') \leq 0 \quad \forall x' \in \partial D, \quad z = \sum_{i=1}^n z_i e_i: \text{vector field on } \partial D$$

Def L が "Wentzellの境界条件" であるとは

$$\mathcal{D}(L) = C^2(\bar{D}) \ni u \text{ に對し}$$

$$Lu(x') = Qu(x') + \mu(x') \frac{\partial u}{\partial n}(x') - \delta(x') Wu(x') + Tu(x')$$

Q : elliptic operator on ∂D .

$$\mu \geq 0 \quad \delta \geq 0$$

つきに、以後考える L の class を設ける。

L : "transversal"

$$\iff \forall x' \in \partial D \text{ に對し } \mu > 0$$

$$\mu(x') > 0 \quad \text{or} \quad \delta(x') > 0 \quad \text{or} \quad t(x', D) = \infty$$

L : "w-transversal"

$$\iff \forall x' \in \partial D \text{ に對し } \mu(x') + \delta(x') + |T1(x')| + t(x', D) \neq 0$$

60

L: "(L.1) 成り立つ"

$$\iff \begin{cases} Q : \text{uniformly elliptic on } \partial D \text{ の } C^{0,\lambda} \text{ class} \\ \mu, \delta \in C^{0,\lambda}(\partial D) \\ T : C^2(\bar{D}) \rightarrow C^{0,\lambda}(\partial D) : \text{continuous} \end{cases}$$

L: "(L.2) 成り立つ"

$$\iff \begin{cases} Q = \frac{\partial}{\partial \tau} \quad \tau \text{ は } C^{1,\lambda} \text{ の vector field on } \partial D \\ \mu, \delta \in C^{1,\lambda}(\partial D) \\ T : C^2(\bar{D}) \rightarrow C^{1,\lambda}(\partial D) : \text{continuous} \end{cases}$$

Prop. 4

$$u \in C^2(\bar{D}) \quad \sup u = u(x') \geq 0 \quad \exists x' \in \partial D$$

$$\implies Qu(x') + \mu(x') \frac{\partial u}{\partial n}(x') + Tu(x') \leq 0$$

$$\therefore Tu(x') \leq 0 \text{ は Prop. 1 に } \bar{D} \text{ 適用}$$

Prop. 5

$$L : w\text{-transversal} \quad u \in C^2(\bar{D}) \quad Lu \geq 0, \sup u > 0$$

$$\implies \exists x \in \bar{D} : u(x) = \sup u \text{ かつ } Wu(x) \leq 0$$

\therefore

D で \sup を attain する時は, Prop. 1 から明らかだから

∂D で \sup を attain する時のみ考えよう. $x' \in \partial D, u(x') = \sup u$

$$0 \leq Lu(x') = \underbrace{Qu(x')}_0 + \underbrace{\mu(x') \frac{\partial u}{\partial n}}_0(x') + \underbrace{Tu(x')}_0 - \delta(x') Wu(x')$$

$\delta(x') \neq 0$ ならば, $Wu(x') \leq 0$ よって $x' \in \partial D$ ならば $W1 \leq 0$

$\delta(x') = 0$ ならば $\mu(x') \frac{\partial u}{\partial n}(x') = 0, Tu(x') = 0$

$\frac{\partial u}{\partial n}(x') = 0$ ならば ~~Prop~~ $Au(x') \leq 0 \therefore Wu(x') \leq 0$

いずれにせよ $\mu(x') = 0, \therefore Tu(x') = 0$ である

\therefore L の transversality に矛盾する

Prop. 6 (Prop. 5 の Corollary)

$L: \omega$ -transversal, $\beta > 0$

$u \in C^2(\bar{D}), Lu \geq 0, (W - \beta)u \geq 0$

$\implies u \leq 0$

Prop. 7

$\forall x' \in \partial D$ に対して $\mu(x') + \tau(x', D) + |T1(x')| \neq 0$

$W1 \neq 0$ とする. その時 $u \in C^2(\bar{D}), Lu \geq 0, Wu \geq 0$

$\implies u \leq 0$

⊙ $\sup u > 0$ とする. \bar{D} の中で \sup を attain すれば

Prop. 2 より $u = \text{const}$, $W1 \leq 0$. $W1 \neq 0$ であるから仮定に矛盾.

$\sup u = u(x') > 0, x' \in \partial D$ とすると

$\frac{\partial u}{\partial n}(x') < 0$ (by Prop. 3) 従って Prop. 5 と同様の

議論により L の (ω) -transversality に矛盾する。

この Prop 4~7 と Index 12 の "この Lemma 3 を用いれば",
次の形の Main result を得る。

Theorem. 4

A : uniformly elliptic on \bar{D} の class $C^{0,\lambda}$

S : $C^2(\bar{D}) \rightarrow C^{0,\lambda}(\bar{D})$ への continuous operator

L は "(L,1) を満たす".



1°, $C^{2,\lambda}(\bar{D}) \rightarrow C^{0,\lambda}(\bar{D}) \times C^{0,\lambda}(\partial D)$

$u \mapsto (Wu, Lu)$ は "index 0" を持つ。

2°, さらに L : weak-transversal ならば, $\beta > 0$ には L

$u \mapsto ((W-\beta)u, Lu)$ は isomorph である。

3° $\forall x' \in \partial D$ には $\mu(x') + |T_1(x')| + t(x', D) \neq 0$ である。

$W \neq 0$ ならば, $u \mapsto (Wu, Lu)$ は isomorph

(Proof)

まず $u \mapsto ((A-\beta)u, (Q-\beta))$ が isomorph であることとを

注意しよう。この map は, $u \mapsto ((A-\beta)u, [u]_{\partial D})$ と

$(u, \varphi) \mapsto (u, (Q-\beta)\varphi)$ を続けたものである。

とあるが ∂D は compact であるから $\varphi \mapsto (Q-\beta)\varphi$ は

$C^{2,\lambda}(\partial D) \rightarrow C^{0,\lambda}(\partial D)$ への写像として, isomorph

に従って, Lemma 1 と合わせれば, 2つの写像は共に isomorph。

また、 $u \mapsto (Su, 0) \quad u \mapsto (0, \mu \frac{\partial u}{\partial n}) \quad u \mapsto (0, Tu)$

$u \mapsto (\beta u, 0) \quad u \mapsto (0, \beta [u]_{\partial D})$ はいずれも

$C^{2,\lambda}(\bar{D}) \longrightarrow C^{0,\lambda}(\bar{D}) \times C^{0,\lambda}(\partial D)$ は compact operator

だから Lemma 3 により

$u \mapsto (Wu, Qu + \mu \frac{\partial u}{\partial n} + Tu)$ は index 0 を持つ

更に $(f, g) \mapsto (f, g - \delta [f]_{\partial D})$ は $C^{0,\lambda}(\bar{D}) \times C^{0,\lambda}(\partial D)$

上の isomorphism から、最後の2つの写像を続けければ

$u \mapsto (Wu, Lu)$ は index 0 を持つことがわかる。

2°: "index 0" を持つことは、1°よりわかる。

従って、1: 1 を示せば十分。

とるが L ; ω -transversal \bar{D} から Prop. 6 より明らか。

3°は Prop. 7 から容易にわかる。

Theorem 4 により、

$\beta > 0$, $f \in C^{0,\lambda}(\bar{D})$ に対して

$$\begin{cases} (W - \beta)u = -f \\ Lu = 0 \end{cases} \text{ は } C^{2,\lambda}(\bar{D}) \text{ の中に unique solution 存在}$$

これを $u = G_\alpha f$ と表わせば、

G_α^L は $C(\bar{D})$ 上の sub-Markov resolvent operator

を定義することは、Theorem 2 と同様にして、わかる。

Theorem 5

A, S は Th. 4 と同じもの

L は "(L.2) をみたす"

$$\forall x' \in \partial D \text{ に対し } \mu(x') + t(x', D) + |T \perp(x')| \neq 0$$

\Rightarrow

$$\forall \beta > 0 \text{ に対し } C^2(\bar{D}) \longrightarrow C^{0,\lambda}(\bar{D}) \times C^{1,\lambda}(\partial D)$$

$$u \longmapsto ((W - \beta)u, \mu \frac{\partial u}{\partial n} + \frac{\partial u}{\partial t} + Tu)$$

は isomorphism である。

証明は Th. 4 と全く同じ方法で, Lemma 2, Lemma 3 を用いれば容易に示せる。

Cor of Th. 5

$$\begin{cases} (W - \beta)u = -f \\ Lu = -g \end{cases} \quad f \in C^{1,\lambda}(\bar{D}), g \in C^{1,\lambda}(\partial D)$$

は $C^{2,\lambda}(\bar{D})$ の中に unique solution \exists かつ

☺ $T' \equiv T - \beta \delta I$ は singular operator on ∂D

Th. 5 において, T の代りに T' を適用すれば,

$$\begin{cases} (W - \beta)u = -f \\ \mu \frac{\partial u}{\partial n} + \frac{\partial u}{\partial t} + T'u = -g - \delta[f]_{\partial D} \end{cases} \text{ は } C^{2,\lambda}(\bar{D}) \text{ の中へ.}$$

unique solution \exists かつ これは同時に, 問題の解である。

従って、 L が“(L.2)をみたす”場合にも、sub-Markov resolvent G_α^L は対応する。

次に、 G_α^L に $C(\bar{D})$ 上の continuous semi-group が果して、対応するか？が問題になるか。そのためには、Hille-吉田の理論により、 $G_\alpha^L(C(\bar{D}))$ が $C(\bar{D})$ の中で dense であることが必要十分である。

この問題に対しては、佐藤-上野の結果がそのまま成立つ。

Theorem 6

L が (L.1) または (L.2) をみたし、更に transversal ならば、 $G_\alpha^L(C(\bar{D}))$ は $C(\bar{D})$ の中で dense である。

従って、 G_α^L には、 $C(\bar{D})$ 上の conti. semigroup が対応する。

Th. 6 は、 G_α^L の range が $C(\bar{D})$ の中で dense であるためには、transversal であることが十分であることを云っているのだが、この証明は、佐藤-上野の方法が全くそのまま、成立つので、省略する。

これで、一応 semi group の存在するための条件を、 L により条件づけられたが (L.1), (L.2) の中で、 T の regularity の条件が具体的にない。それは、 S についても同様であるが、

従って、 S とは T の regularity に関する条件を具体化する必要がある。

§.4. Singular operator の regularity について

A は \bar{D} 上の uniformly elliptic operator of 2nd order であるから、 \bar{D} には Riemann metric が与えられる。

$\bar{x}y$ は、その意味での geodesic distance

Lemma 4 [$\partial_x u$ の性質]

$$(1) \exists C > 0 \quad \forall u \in C^2(\bar{D}) \quad |u(y) - \partial_x u(y)| \leq C \|u\|_2 \bar{x}y^2$$

$$(2) \exists C > 0 \quad \forall u \in C^2(\bar{D}) \quad |\partial_x u(y) - \partial_x u(y')| \leq C \|u\|_2 \bar{x}x'$$

== 12, $\| \cdot \|_2$ は $C^2(\bar{D})$ の norm

これは $D \subset \mathbb{R}^N$ の場合に示して、あとは、適当に修正すればよい。
 D が有界領域の場合は直接計算すれば容易に示される。

Theorem 7

$\alpha > 0, 0 < \mu < 1, \overset{M}{\#} : \text{real } C > 0$ が存在して

$$(a) \int_{B(x,r)} S(x, dy) \bar{x}y^2 \leq C r^\alpha$$

$$(b) \int_{C[B(x,\rho) \cup B(x',\rho)]} |S(x, dy) - S(x', dy)| \leq C \bar{x}x'^\mu \frac{1}{\rho^{M-\mu}}$$

$\implies \exists 0 < \lambda < 1$

$u \mapsto \int S(x, dy) [u(y) - \partial_x u(y)]$ は $C^2(\bar{D}) \rightarrow C^0 \wedge C^1(\bar{D})$; conti.

(Proof)

 $0 < \exists \lambda < 1$ $\overline{\alpha\alpha'}$ が十分小さいと \Rightarrow なる。

$$\left| \int S(\alpha, dy) [u(y) - \theta_x u(y)] - \int S(\alpha', dy) [u(y) - \theta_{x'} u(y)] \right|$$

$$\leq C \|u\|_2 \overline{\alpha\alpha'}^\lambda \text{ であることを示せば十分。}$$

$$\overline{\alpha\alpha'} = \varepsilon < 1, \quad 0 < \delta < 1.$$

$$I_1 = \left| \int_{B(x, \varepsilon^\delta) \cup B(x', \varepsilon^\delta)} S(\alpha, dy) [u(y) - \theta_x u(y)] \right|$$

$$I_2 = \left| \int_{B(x, \varepsilon^\delta) \cup B(x', \varepsilon^\delta)} S(\alpha', dy) [u(y) - \theta_{x'} u(y)] \right|$$

$$I_3 = \left| \int_{C[B(x, \varepsilon^\delta) \cup B(x', \varepsilon^\delta)]} S(\alpha, dy) [u(y) - \theta_x u(y)] - S(\alpha', dy) [u(y) - \theta_{x'} u(y)] \right|$$

と $\delta < \varepsilon$

$$\left| \int S(\alpha, dy) [u(y) - \theta_x u(y)] - \int S(\alpha', dy) [u(y) - \theta_{x'} u(y)] \right|$$

$$\leq I_1 + I_2 + I_3.$$

$$B(x, \varepsilon^\delta) \cup B(x', \varepsilon^\delta) \subset B(x, 2\varepsilon^\delta), B(x', 2\varepsilon^\delta). \quad \text{に注意して}$$

Lemma 4 (i) と (a) を用いて

$$I_1 \leq C_1 \|u\|_2 \int_{B(x, 2\varepsilon^\delta)} S(\alpha, dy) \overline{\alpha y}^2 \leq C_2 \|u\|_2 \varepsilon^{2\delta}$$

$$I_2 \leq C_2 \|u\|_2 \varepsilon^{2\delta} \text{ 同様にして}$$

$$I_3 \leq \int_{C[B(x, \varepsilon^\delta) \cup B(x', \varepsilon^\delta)]} |S(\alpha, dy) - S(\alpha', dy)| |u(y)| + \int_{C[B(x, \varepsilon^\delta) \cup B(x', \varepsilon^\delta)]} |S(\alpha, dy)| |\theta_x u(y) - \theta_{x'} u(y)|$$

$$+ \int_{C[B(x, \varepsilon^\delta) \cup B(x', \varepsilon^\delta)]} |S(\alpha', dy) - S(\alpha, dy)| |\theta_{x'} u(y)|$$

$$\text{第1項} \leq C_4 \overline{xx'}^\mu \frac{1}{\varepsilon^{\delta N}} \|u\|_2 = C_4 \varepsilon^{\mu - \delta N} \|u\|_2 \quad (\text{注 (b)})$$

$$\text{第2項} \leq C_5 \|u\|_2 \overline{xx'} \int_{C[B(x, \varepsilon^\delta)]} S(x, dy) \leq C_6 \|u\|_2 \varepsilon^{1-2\delta}$$

⊙ Lemma 4 (2) と

$$\int_{C[B(x, \varepsilon^\delta)]} S(x, dy) \leq C \varepsilon^{-2\delta} \quad \text{に注意すればよい。}$$

$$\text{すなわち} \int S(x, dy) \overline{xy}^2 \leq C \quad (S(x, dy) \text{ の定義!!) \text{より出る}$$

$$\text{第3項} \leq C_7 \|u\|_2 \varepsilon^{\mu - \delta N} \quad \text{は 第1項と同様。}$$

$$\therefore I_3 \leq C_8 \|u\|_2 (\varepsilon^{\mu - \delta M} + \varepsilon^{1-2\delta})$$

$$\text{故に} \quad I_1 + I_2 + I_3 \leq C_9 \|u\|_2 (\varepsilon^{\alpha\delta} + \varepsilon^{\mu - \delta M} + \varepsilon^{1-2\delta})$$

$0 < \mu - \delta N < 1$ なるように δ を定め、更に $\alpha\delta < 1$ なるように出来る。 $\lambda = \inf(\alpha\delta, \mu - \delta M, 1 - 2\delta)$ とおけば

$$I_1 + I_2 + I_3 \leq C_{10} \|u\|_2 \varepsilon^\lambda \quad \text{となる。}$$

Cor of Th. 7

$$Su = cu + \frac{\partial u}{\partial X} + \int S(x, dy) [u(y) - \theta_2 u(y)]$$

C, X の ε に関する class $C^{0,\lambda}$ とする。

$$C^2(\bar{D}) \longrightarrow C^{0,\lambda}(\bar{D})$$

$u \longmapsto Su$ は continuous である。

さらに、Th. 7 の条件を開放する S は、具体的にどのような形のものがあるかを、次の Th で述べる。

Theorem. 8

$m(dy)$; A_{12} induce Jkz Riemann volume element

$$(1^\circ) \quad K(x, y) \leq C \quad \forall x, \text{ almost all } y$$

$$(2^\circ) \quad |K(x, y) - K(x', y)| \leq C \bar{x}'^\mu \quad \forall x, \forall y' \text{ almost all } y$$

その時 $S(x, dy) = \frac{K(x, y)}{\bar{x}y^{N+2-d}} m(dy)$ は Th. 7 の仮定をみたす。

(Proof)

(a) $\tilde{m}(\partial B(x, r))$ を 球面 $\partial B(x, r)$ の面積とすると空間 \bar{D} は compact 故に $\exists K_1 r^{N-1} \leq \tilde{m}(\partial B(x, r)) \leq K_2 r^{N-1}$

$$\begin{aligned} \int_{B(x, r)} S(x, dy) \bar{x}y^2 &\leq C \cdot \int_{B(x, r)} \frac{m(dy)}{\bar{x}y^{N-d}} \leq C' \int_0^r \frac{1}{t^{N-d}} \cdot t^{N-1} dt \\ &\leq C' \int_0^r t^{-(1+d)} dt \equiv C'' r^\alpha \end{aligned}$$

(b) $N+2-d > 0$ としよ。

$$\begin{aligned} &\int_{C[B(x, \rho) \cup B(x', \rho)]} |S(x, dy) - S(x', dy)| \\ &= \int_{C[B(x, \rho) \cup B(x', \rho)]} \left| \frac{K(x, y)}{\bar{x}y^{N+2-d}} - \frac{K(x', y)}{\bar{x}'y^{N+2-d}} \right| dm(y) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \left| \frac{K(x, y)}{\bar{x}y^{N+2-d}} - \frac{K(x', y)}{\bar{x}'y^{N+2-d}} \right| &\leq \frac{1}{\bar{x}y^{N+2-d}} |K(x, y) - K(x', y)| \\ &\quad + |K(x', y)| \left| \frac{1}{\bar{x}y^{N+2-d}} - \frac{1}{\bar{x}'y^{N+2-d}} \right| \end{aligned}$$

$$\text{第1項} \leq C \frac{1}{\bar{x}y^{N+2-d}} \bar{x}'^\mu \leq C \frac{1}{\rho^{N+2-d}} \bar{x}'^\mu$$

$N+2-d = k \nu \quad 0 < \nu < 1$ なる ν 自然数 k を選ぶ。

$$\left| \frac{1}{\bar{x}y^{k\nu}} - \frac{1}{\bar{x}'y^{k\nu}} \right| = |\bar{x}'^\nu - \bar{x}^\nu| \sum_{\substack{i+j=k \\ i, j \geq 1}} \frac{1}{\bar{x}y^{i\nu} \bar{x}'y^{j\nu}}$$

$$\begin{aligned}
&\leq R |\overline{x'y}^\nu - \overline{xy}^\nu| \frac{1}{(\overline{xy} \wedge \overline{x'y})^{(k+1)\nu}} \\
&\leq R \overline{xx'}^\nu \frac{1}{(\overline{xy} \wedge \overline{x'y})^{N+2-d+\nu}} \quad (\because 0 < \nu < 1 \text{ のとき } |\overline{xy}^\nu - \overline{x'y}^\nu| \leq \overline{xx'}^\nu) \\
&\leq R \frac{1}{\rho^{N+2-d+\nu}} \overline{xx'}^\nu \\
\therefore \int_{C[B(x, \rho) \cup B(x', \rho)]} |S(x', dy) - S(x, dy)| &\leq C' \left(\frac{1}{\rho^{N+2-d}} + \frac{1}{\rho^{N+2-d+\nu}} \right) \overline{xx'}^{2+\nu\mu}
\end{aligned}$$

$\rho \cdot \overline{xx'} < 1$ としよ。おから $M = N+2-d+\nu$, $\tilde{\mu} = \nu + \mu$ とおけば、

$$\leq C'' \frac{1}{\rho^M} \overline{xx'}^{\tilde{\mu}}$$

境界上の singular operator T についても、同じ型の結果を得る。

$\tilde{x'y}$ を local には $\sum |x^i(y) - x^i(x)|^2 + \chi^N(y)$ と equivalent 度量として定義する。

$\underline{\text{i.e.}} \quad \forall (U, \chi) \quad U \cap \partial D \neq \emptyset, \quad U \supset K : \text{compact に } \exists \subset$
 $\exists K_1, K_2 > 0 \quad K_1 \tilde{x'y} \leq \sum_{i=1}^{N-1} |x^i(y) - x^i(x)|^2 + \chi^N(y) \leq K_2 \tilde{x'y}$
 for $\forall x' \in K, \forall y \in K$

Theorem 9

(a) $\forall x' \in \partial D \quad \int_{B(x', r)} t(x', dy) \tilde{x'y} \leq C r^\alpha$

(b) $\forall x', \forall x'' \quad \int_{C[B(x', \rho) \cup B(x'', \rho)]} |t(x', dy) - t(x'', dy)| \leq C \overline{xx''}^\mu \frac{1}{\rho^M}$

$\exists \alpha > 0 \quad 0 < \mu < 1 \quad M : \text{real } C > 0$

$\Rightarrow 0 < \lambda < 1, \quad u \mapsto \int_{\partial} t(x', dy) [u(y) - \theta_x^* u(y)]$ は $C^2(\bar{D})$ から $C^{0,1}(\partial D)$ への conti. operator である。

更に $|K(x', y)| \leq C$

$\forall x, a.a. y$

$$|K(x', y) - K(x'', y)| \leq C \overline{x''}^m \quad \forall x', \forall x'', a.a. y$$

つまり, $t(x', dy) = \frac{K(x', y)}{x y^{n-d} \tilde{x}' y} m(dy)$ は, この定理の仮定をみたす。

これらの証明は Th. 8 に同じである。

Remark 1

Wentzell の境界条件 L が (L.2) をみたす場合 T は $C^2(\bar{D})$ から $C^{1,\alpha}(\partial D)$ への conti. op. であることを必要とするが, この条件に対する Th. 9 の形での条件は, 未解決である。

Remark 2

A 及び Q が uniformly elliptic であることは, 微分方程式の結果に帰着させるために必要だったが, degenerate した elliptic op. については, この種の境界問題はどうか。

文献

- [1] BreLOT-Choquet-Deny のセミナー - ト, 1965/1966
- [2] Courrege ; Bourbaki のセミナー - ト 1965/1966, n°302
- [3], Sato-Ueno ; J. Math. Kyoto, 4-3 (1965)